

武家名目抄稿

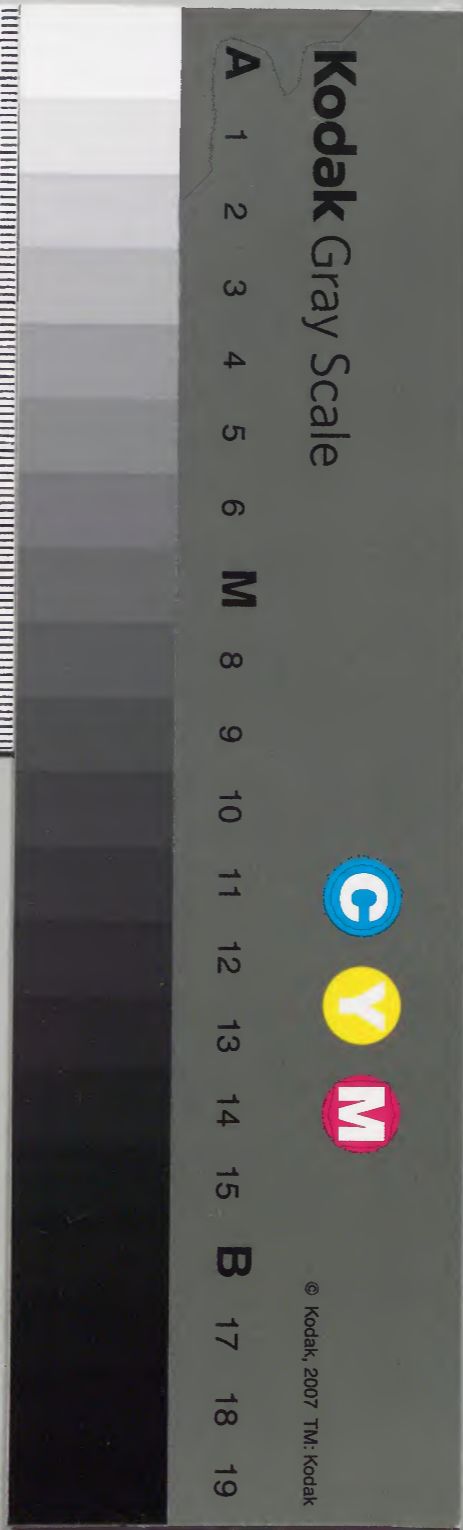
居處部

十八

		和書門類	
		二五二〇六號	
		七七函	
		八架	
四五六冊			

庫文閣内		和書類	
二五三函		二五二〇六號	
一一架		四五六冊	

内閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457 (157)
函號	153 275



武家名目抄稿第十八冊

居處部十八目錄

弓場

棚

遠的場

馬臺

流鏑馬屋

相廣馬場

第十冊
大追物馬場

笠懸馬場

的山

的場

教塚

馬場殿

馬場

流鏑馬場

大馬場

外馬場

卷之十

武家名目抄稿第十八冊

居處部十八目錄

弓場

的山

棚

的場

遠的場

教塚

馬臺

馬場殿

流鏑馬屋

馬場

相廣馬場

流鏑馬場

犬追物馬場

犬馬場

笠懸馬場

外馬場

内馬場

芝馬場

馬場末

馬走

揚穴

雄埒

埒上手

埒門

外傍示

外繩

壺馬場

馬場本

䟽

扇形

埒

雌埒

埒下手

内傍示

小繩

狩場

狩倉

鷹場

狩山

武家名目抄稿第十八冊

居處部十八

弓場

吾妻鏡云仁治二年正月廿三日壬子於弓場相
加宿老之類有射的之儀云々

又云建長四年四月十四日丁卯御弓始射手六
人入南門候弓場左右筵

又云正嘉二年正月十五日乙丑於御弓場有御
弓始射手十人一五度射之云々

鎌倉年中行事云正月十七日御的アリ中射手

笠符ヲ著替一人ニ見知レシト長尾ハ乱髮
ヲ顔ハ颯ト振リ懸根津ハ刀ヲ以テ已カ額ヲ
突切テ血ヲ面ニ流シカケ切テ落シタリツル
敵ノ頸鋒ニ貫キトツ付ニ取着テ只ニ騎將軍
ノ陣へ馳入ル中將軍ハ何クニ御座候ヤラン
ト問へハ或人アレニ扣へサセ給ヒテ候也ト
指差テ教フ馬ノ上ヨリノヒアカリ見ケレハ相
隔タル事草鹿ノ的山計ニ成ニケルアハ幸
ヤ夕ニ一太刀ニ切テ落サンスル者ヲト二人
屹ト目クハセシテ中々馬ノ閑々ト打マセケ

庭訓往来云南面者通笠懸之弓端令結埒同可
築的山

鎌倉年中行事云正月十七日御的アリ御的五
尺二寸的皮串御的山ハ小舎人役也是又上代
ヨリ旧規也

岡本記云あ川中に別に山もあり海とやま
も申なり

堀

倭名類聚抄云射埒唐韵云他果反字亦作埒埒
氏漢語抄云射埒以

久波止古路世間云阿無射堞也四聲字苑云堞
豆知今按又用堞字音明射堞也

類聚國史云仁明天皇兼和元年正月甲戌於永
安門裏西腋廊前新作堞備于御射紫宸殿西南
端廊被徹毀以擬箭道也

太平記云芳賀兵衛岡本信濃守白絲ノ鎧著夕

ル岩松ヲ左馬頭殿ソト目ニ懸テ組テ討ント

相近付ク岩松ハ又元來左馬頭ノ傘ニ代ラン

ト鎧ヲ著替シ上ハナシカハ傘ヲ可惜二人共

ニ閑々ト馬ヲ歩マセ寄テアハヒ巳ニ草鹿ノ

アツチ長ニ成ケル時岩松カ郎等金井新左衛
門岩松カ馬ノ前ニ馳塞テ岡本引組馬ヨリト
ウト落ケルカ互ニ中ニテ差違テ共ニ傘ヲ止
テケリ

了俊大學帛云笠屋の村探も九杖は侍きて七
杖の的は立ぬり

高忠圖書云大的丸物草麻笠懸候にもあ川
ちといふつふ候はと云事あまき
也他大的斗候との日ハ的場といふとも候
しか候も何つちと云つまふと候

佐々宗之守書云塚の寸法定事あり見てよき
やうに上をけりにしてあ方の上かを越えり
くはくゆる小的の塚を庭の廣さにあさう形
川をゆるり矢落といつゝつゝゆるり
河津を対面せしつゝゆるりにゆるり後向
ふをゆるり海へき也又産所の引目の時を北矢
落は忌なり弓場をゆるり射場をゆるり不中
以^イ後ゆるりい^イ中ゆるり

上田越前守園物記云急物乃あつちの遠さ十
一杖より打て十杖より急ゆるりあつちと準とのあ

けし、矢とけより少くあり

又云あつちの高廿三尺九寸横四尺一寸あつち
照初らさ之尺五寸宛也上のよ六尺六寸斗は
ゆるりあつちにはゆるり急ゆるりあつちのゆるり
く大ゆるり此分あり見ゆるり能く可極
射場拾遺記云あつち下と云は小的にあま
るゆるり急ゆるり的立つまゆるりゆるりゆるり
らといゆるり物ゆるりゆるりゆるり又あつちゆるり
あつちゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり射ゆるり
自然又大的をゆるりゆるり射ゆるりゆるりゆるり

るよふ熱て當座ありあつちを志いし多
向成言下と云なり

笠掛記云笠可付多指にあつち成つふ事有
引目とめ乃きはうらめしく此方にあつ
つる指切へむしはけくぬし耐多指切乃
るよ川海所にまゝさなり成ありてまぢり
て耐海也矢代也とのまゝにゆゑなり

按和名抄探也以久波止古跡と讀ふは古語
に的成以久波といふ所の故なりいとあ
る系世流詞あり天曆の比世まはるや阿
豆知といふを後毎ハ省かれて阿豆知とい

豆知といふを後毎ハ省かれて阿豆知とい
ふ又万止也万ともいひたり万止也万ハ義
よく少えられハ阿豆知といふよりハ未

詳

的場又号的庭

太平記云義貞義貞坂本ヲ打出シ時先皇居ニ
参テ天下ノ落居ハ聖運ニ任セ候ハ心トス
ル處ニ候ハス何様今度ノ軍ニ於テハ尊氏カ
籠テ候東寺ノ中へ矢一射入候ハテハ歸参ル
マシキニテ候ト申テ出タリシ其言ニ不違敵

ヲ一の場ノ内ニ攻寄せタレハ今ハカウト大
ニ悦テ云々
了俊大草紙云の庭の遠さハ昔ハ弛弓少ク三
十ニ杖子射塚を築くのを以テ十杖に立リ
弓馬問答云の端といふ事ハ惣名所の的
海方城より己の端といふ所をハ弓端と
云也筒木よりの半近ニ十ニ杖あり
又云の端の遠さニ十ニ杖有テ半杖立ハニ十
一杖とてハ得半長廿ハ出の上ハ八ハ寸也ニ

方回也といふ得半の大廿六寸五分なり
百子守書云の端の遠さニ十三杖なり但近年
廿ニ杖と云々
法量物云笠懸事の端の遠さハ杖ヲ打テハ杖
又可立の皮の布ハの長さ五尺云々

遠的場

太平記云山門本間ト相馬ト二人御方ノ兵ノ
二町計隔タリタル向ノ尾ニ陣ヲ取テ居タリ
ケルニ向テ例ナラス敵兵ノハタラキ候ハ軍
ノ候ハンスルヤランナラシニ一ツヲ射テ見

候ハシ何ニテモ的ニ立サセ給ヘト云ケレハ
是遊ハシ候ヘトテミナ紅ノ扇ニ月出シタル
ヲ矢ニ挾テ遠的場タテニソ立シリケル

數塚

高志写書云カモウの言サ一尺五寸前後の
何モ弓此ニ付後ハ扇だけあつち此方へよ
弓張記云カハ法ハ乃寸法の事傳り云尺斗
多サ一尺五寸斗りぬり大的のとき弓立此
にたまふも二つ有ものありうらもの

つら一尺五寸的乃方へよりニツ乃百弓杖一
川えにう川

射礼私記云數つらのカサ一尺二寸金のお
と後との百弓法えりの一杖あちて後此
數つら錢一尺五寸的の方へよん也又ハハ
寸とも云

又云數つらといふハちち乃時數をさ
ふとの名なり弓右郎の役として志の
外錢長サ一尺二寸に切て悪くぬりてを
すぬぬ事も其前後共に數つら乃後のきは

五十一つ、ちやくなりちやくにちやくさ
しかく根ありお後共に回おなり秘説と云
より巨細と書載るに不及歩射の時用事
百歩書云五歩弓次第事教塚乃言廿一尺
二寸本の廻り三尺斗ふりて上乃見合
ひて次第に細く是は丸くつくぬすへ乃教
塚の中へ四寸はより形石成入るを付く
をきぬみしてつきかゝむる是は弓圓と云也自
然教塚の向きは射の所成と云人爲ありま

教塚乃廻りおとに足付物をあらしめて其
中へすね成入るはうよきあり教塚つく事的
かくふ次第定法にハれれとも教塚のうぬ
まくに的のさいきまきも也惣々賞あり教
塚弓場と名物ある故あり
又云五歩弓教塚の事弓を即足はうらむて
しらふ身一あつち乃おかとの通りよりおの
教塚をつくぬす堀より教塚の遠さ卅三杖れ
又但近年ハ廿三杖又五歩的その内をすお
ぬりまへとうらもの教塚のる二杖なり

弓馬問答云教壇の事高廿七寸と心得へきれ
り九寸ともあるなり
佐竹宗之少書云教壇はほくとも又をくとも
中

武田射礼日記云數塚へ寄ルハキ様前弓ハ弓
ノ末筈一尺ハカリ數塚ノ本ニ打懸テカシコ
マリ後弓ハ末筈數塚ニトマクトハカヌニ畏
マルヘシ

馬臺

扶桑略記云康平五年五月廿二日主上出御馬

臺御覽競馬皇大弟參觀

馬場殿

吾妻鏡云建仁三年十一月廿三日丙戌將軍家
於馬場殿令射小笠懸給

又云嘉禎元年閏六月廿三日甲戌將軍家渡御
馬場殿憑射藝以其次入御大膳権大夫師負屋
形即還御云々

又云仁治二年正月廿三日壬子將軍家渡御馬
場殿前武州被參遠江前司駿河守宮内少輔撰
津前司上総権介出羽前司以下數輩參上先令

若輩等射遠笠懸

又云文永二年八月五日庚午將軍家自馬場殿
入御々産所即還御

鎌倉年中行事云御犬追物被遊馬場殿ノ事外
様ハ被仰出方四町ニ御築地ヲツキ面ノ方ニ
御門ヲ立ク口木ノ御所ヲ被造南向ナリ

花營三代記云應永廿九年壬寅七月七日於馬
場殿御方御所様御笠懸アリ御相手六騎

長祿二年以來申次記云正月十四日さきつち
やう乃事及晩少了馬場殿了了や一中たり

三月法廐の法縁ニ成りてありに法住

氏ニ

季瓊日記云文正元年五月八日御馬場殿南邊
泥清之事門前掃地御談奏之聊有御領受色也

流鏑馬屋

吾妻鏡云嘉禎三年七月十九日甲午北條五郎
時頼始可被射来月放生會流鏑馬之間此初於
鶴岡馬場有其儀今日武州為扶持之被出流鏑
馬屋駿河前司以下宿老等參集云々

又云寛元四年八月十六日壬寅流鏑馬十六騎

揚馬訖而射手十人俄有霍亂之氣申障已及神
事違例仍於御棧敷有御沙汰以雅樂左衛門尉
時景為御使可勤此射手之旨被仰駿河式部大
夫家村畧泰村起座行向弟家村座前早可應仰
之旨再往加諷詞等時只今稱無射馬泰村馬者
答用意之由泰村存如此時儀射馬弓深山路名馬也置
鞍弓兼以令置流鑄馬舍近邊云々家村失據于
遁避自取敷皮副于下手塚向流鑄馬舍
又云宝治元年八月十五日乙未放生會延引去
六月合戰觸穢之上依彼追討余炎流鑄馬舍燒

失故也京都就此事自去六月九日關東飛脚入
浴日至七月五日觸穢云々

馬場

文德實錄云天安元年三月丁卯有勅遣使神泉
苑馬場角御馬之走足也
百練抄云寬和二年丙戌三月十日右近馬場可
改南北之由宣下
吾妻鏡云文治四年二月廿八日甲午鶴岡宮被
始行臨時祭二品御出小山七郎朝光持御劔著
御廻廊之後有流鑄馬二騎韋氏盛澄射之馬長三騎

渡馬場遠近御家人為營勤此會群集云々九月
廿日壬午景能此間於鶴岡馬場邊構小屋是為
警固宮寺也
又云嘉禎元年四月十一日癸酉今日於馬場為
周防前司奉行鳥巢事被經其沙汰
又云文應元年八月十六日辛亥武州參宮同昨
將軍家雖無御出馬場之儀棧敷等如例大夫判
官行有大夫判官廣細大夫判官行氏等警固馬
場
滋抄云泰時消息近年在京都武士所物取射

之由也馬場に定て候より其沙汰あり事
候實に代々皇居乃跡也言の端より多し事
也
出た御道山山女と定て
季瓊日録云寛正六年八月廿二日今日於細川
右京大夫殿馬場御覽御馬仍給冗不及披露而
退出也四鼓刻御成云々上様並今出川殿御出
云々

織田家譜云天正九年二月信長信忠信雄上洛
中
信長於禁裏前構馬場以召近國群士見馬揃

其粧盡美明智日向守奉行
安土日記云東山慈照院御庭二年被立置候
九山八海ト申候、都鄙ニ無隱名石御座候是
又被召寄御庭ニ居サセラレ其外浴中路外之
名石名木集メ眺望ヲ盡シ馬場ニハ櫻ヲ植号
櫻之馬場共無殘所被仰付云々
賀越鬪諍記云富田彌六桂田玄蕃丞ハ落行處
ヲ生捕テ柳ノ馬場ニテ首ヲ刎ラレ
相廣馬場
吾妻鏡云壽永元年六月七日丙午武衛令出由

井浦給壯士等各施弓馬之藝次以股解沓差長
八尺串召愛甲三郎令射給五度射之皆莫不中
而武衛令打彼馬跡与的下給之處其中間為八
杖也仍積此杖數可定相廣之馬場之由被仰出
相廣之馬場いづれと云々
貞丈う説し豎た橋は田の橋をさるゆへお
廣くのは馬場に宜き所也
八杖の数を積りて定むる也
十に丈四方の三浦村の邊に
考證
いづれある也

相字ハ只字訓を
疏と棚とのあま乃原
き馬場をいふ也積杖杖敷と
りた馬跡と的下の種をばう
道の杖敷に定らせしと
うに杖一徹をばし

流鏑馬馬場

吾妻鏡云文治三年八月四日壬申今年於鶴岡
依可被始行放生會被充催流鏑馬射手並的立
等役云々九日丁丑鶴岡宮中殊以掃除今日造
馬場結埒仍二品監臨給

流鏑馬水身云々埒ハ乃事二丁取
うに杖ハ只字訓を
馬場ハ只字訓を
馬場ハ只字訓を

大追物馬場

賀越闘争記云 於東庄大窪 永祿四年四月六日
朝倉左衛門督義景奉ノ庄依大窪大追物有
之御伴ノ人衆一万餘人見物ノ貴賤其數ヲ不
知馬場之廣ハ方八町ニッ構ハラレケル

大馬場

大異本伯耆卷云名和殿ハ六波羅ヨリ催從ニテ
先月千劔破ノ城ニ向ヒタマフトテ御上洛ト
申ス成田是ヲ聞カテ落シテ胸ヲサカリユハ
如何ニト歎カシクテ夫レハ何日御帰可有ト
問ヒケレハ亦人申ハイヤトヨ大殿ハ上リタ
大マハス若殿計御上洛候タシカニ昨日マテ犬
ノ馬場ニテ暮目ノ音聞ハ候ト申システ通
リケレハウレシカ申ス計ナシ
家中竹馬記云犬の馬場をばあつはるはふ
以犬乃字場をいふらふ家記云

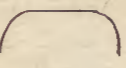
笠懸馬場

江洲往來云河館造代事不うる各別代ノ畠南
西ノ通笠懸ノ馬場合儀埒同ノ築的山
射所拾遺抄云笠懸の字場は寛應三年畠中
のあそ細下ノ法量に在るはつて場とけハ
四十丈餘ノ畧の廣さハ上は二人庭ハ一人ハ
寸廣さある寸あり
笠懸記云字場とけ一畝

四杖半

此の村に
 大田村の
 公方様は矢取高尾が下
 世に下りて居るが
 此の村に
 大田村の
 公方様は矢取高尾が下
 世に下りて居るが

此の村に
 大田村の
 公方様は矢取高尾が下
 世に下りて居るが



美濃の旗一ツ

日記付人

日記付人
 に
 日記付人

此の村に
 大田村の
 公方様は矢取高尾が下
 世に下りて居るが

此の村に
 大田村の
 公方様は矢取高尾が下
 世に下りて居るが

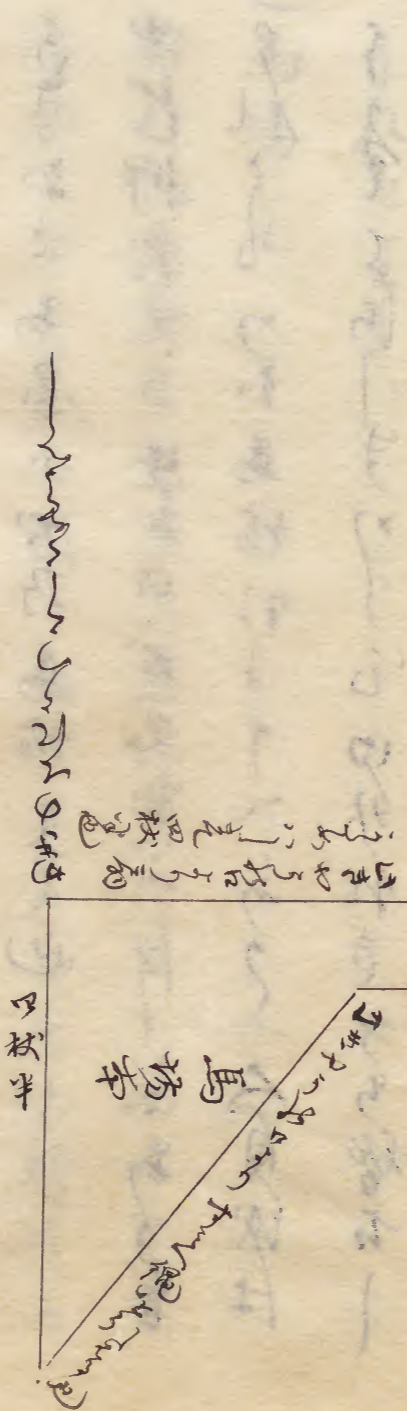
此の村に
 大田村の
 公方様は矢取高尾が下
 世に下りて居るが

此の村に
 大田村の
 公方様は矢取高尾が下
 世に下りて居るが

此の村に
 大田村の
 公方様は矢取高尾が下
 世に下りて居るが

壺馬場
内馬場
外馬場

多馬問答より小多馬の事並馬の字場をたし
まにたくしおれり



き也ハ風さう
むふーあーあー
いふふあーあー

見物有也
夫代馬たふさ
引日さうあー

家中竹馬記云馬場をあげると云は笠懸の
場の事也大乃馬場をいふのは笠懸の
馬場をいふ事なりと云外の馬場と云ハ休
場と云ハ一坪一坪と見物籠を場と云ハ休
也又庭に大乃馬場といふ事ハ庭に馬場
馬場といふ由馬場ともいふ事ハ庭の外に馬場
といふ事也大乃馬場といふ事也

出陣書云此家の大兄おん付とありき
おん付と云ハ馬場といふ事なりとありき
いとありきとありきとありきとありき

芝馬場

耐行指道抄云芝は乃馬場といふ事なりとありき
芝の事なりとありきとありきとありき
芝の事なりとありきとありきとありき
芝の事なりとありきとありきとありき
芝の事なりとありきとありきとありき
芝の事なりとありきとありきとありき
芝の事なりとありきとありきとありき
芝の事なりとありきとありきとありき
芝の事なりとありきとありきとありき
芝の事なりとありきとありきとありき

馬場本

芝懸記云たいてい乃事をよを扇うに馬の

たてぬき場抄頭より何らうへにハ馬場中菊
別海魚一

疏

富藤親景記云文正元年七月十九日馬場原共
殺是レサクリヲ被充了

射所指邊一抄云是處の馬場北馬鹿乃の根中ハ
浦まで寸程の上段で候と云へて其端候と云
りといふ了る内あり跡ハぬれありありと
てさうりとりぬれりとのりは牛跡を奉
上置きの馬場のさうり馬場次馬場乃あり概

大うの法量物ハ在てまの馬場ハハ四十丈
程の跡乃候ハ上ハ二尺と云へハ一尺ハ寸ぬ
うさ六寸候

馬場原云是處乃事馬場の遠さ一町と云へり
乃廣さ一尺五寸馬場中馬場末回あり且口
傳中馬場ハ五十杖ハ打候きりりハ馬場
まてさうりさのき立多馬場少し候き極ハ又
まよきやうにまへに馬場末ハ又ハ牛馬場
場ハ的小置掛をて射為候り又さうりハ馬場
本馬場末ハ一尺八寸的通一尺五寸也

馬走

言無記云たにそのの事をよを扇うるに言乃
くく柳了掃山既くけくうくくくくくくく
水水魚一扇うく水す并ひのく水水乃くくく
馬の取を向てひうくくくくくくくくくく
正のりくく扇のまのりまん中をくくくく
お既むつちうくく水引目をくくくくくく
を眼につくつくくくくくくくくくくく
馬のくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

法量物云小笠事畧的此言走の習いす

扇形

高忠聞書云高忠射拜并射の出入の事畧也
あきうくくく打入中程にむくく矢既さくく
くく扇を二重にうくくくくく

揚兜

言無記云言のうくく一當れ射る人馬場中
乃あけあふうくくうちうくくく踏のくくく
改をぬくくくくくくく二當り射射子直に
馬場中くくく入くくく射るぬくくく三當

里馬坊末まで...乃...に...
益懸礼...
...

...

増と...
...

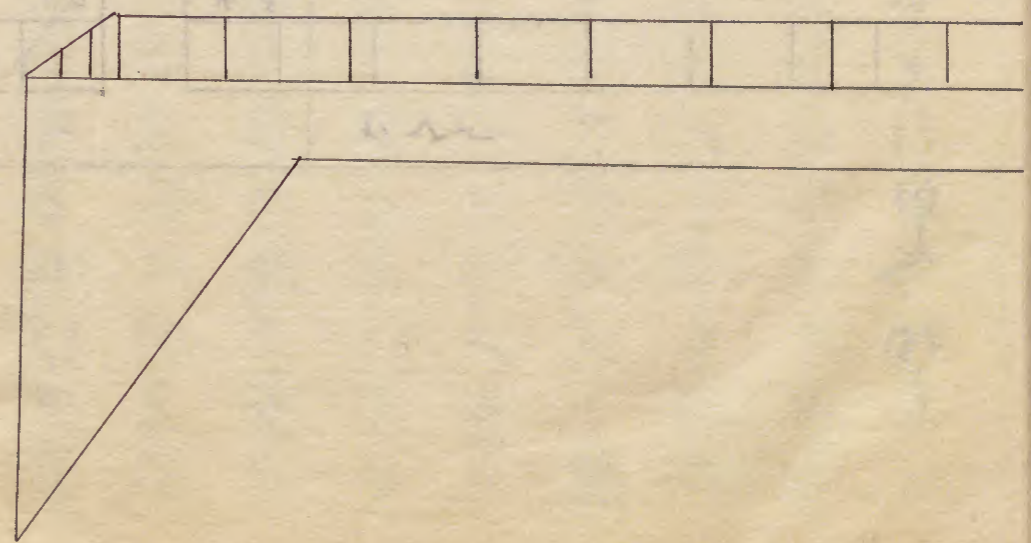
的の...
...

...

...

...

串々々々の中書より中書して五人五人
 此等の中書一人二三斗の字をむす
 物ハ後をもちてゆいぬの乃うたむ
 ホハらるん一と一も木の子急つ場
 よけり成り



雄埒

宇槐雜抄云

保延三年九月廿三日
 仁和寺競馬條

次騎射左十人

右八人南上次左近番長掛の兵衛立の一的忠

利二的武則方三的信兼文的立番長兵衛等相具他

番長各近衛一人赤衣下部一人立的了帰之時

件二人猶留居雄埒下毎的筋

埒門

吾妻鏡云嘉禎二年八月十六日庚子將軍家御

奉幣于同鶴岡上下宮其後流鎬馬以下有馬場儀延

尉定負候埒門邊具子息

内傍示 有知此門並其
外傍示 同土不宮其外感備出以平宮其外
小繩 是餘云其餘二年八月十六日其七其外
外繩

射所指造抄云其務の事より小繩乃
其ありさ多枝一付たり其外
其外 曰其外也又付たり其外
十三枝あり其外云其外は是外
其外 其外は其外乃其外は其外
其外 其外は其外乃其外は其外

狩場 其外は其外乃其外は其外
其外 其外は其外乃其外は其外
其外 其外は其外乃其外は其外

吾妻鏡云 建久四年五月廿九日記 祐泰去安元二年十月之
比於伊豆奥狩場不圖中矢墜命是祐經所為也
又云仁治二年九月廿二日丁未左親衛自藍澤
被歸數日踏山野熊猪鹿多獲之其中熊一者親
衛以引目射取之為先代未聞珍事之由諸人一
同感申又下河邊左衛門尉行光者自幼少住于
太田下河邊等田畔定不馴如此狩場歎之由傍

...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

鷹場

吾妻鏡云文治五年十一月十七日癸酉二品為
 歷覽鷹場出大庭邊給...

又云建仁二年十二月十九日己未將軍家為覽
 鷹場令出山内庄給入夜還御云々

庚辰年四月廿五日

...

...

...

...

...

...

...

...

